

# 岐阜バッハ合唱団演奏会2023

# バッハ:ミサ曲口短調

BWV232

指揮：植松 峻  
独唱：川島幸子 (ソプラノ)  
三輪陽子 (アルト)  
北村敏則 (テノール)  
林 剛一 (バリトン)  
合唱：岐阜バッハ合唱団  
管弦楽：名古屋バッハ合奏団  
オルガン：村上 杏

2023年 11月17日[金]

18:30 開演 17:50 開場

サラマンカホール

入場料=3,500円 (当日共・全自由席)



# BACH: MESSE IN H-MOLL BWV 232

## GIFU BACH-CHOR NAGOYA BACH ORCHESTRA TAKASHI UEMATSU

SACHIKO KAWASHIMA, SOPRANO  
YOKO MIWA, ALTO  
TOSHINORI KITAMURA, TENOR  
KOICHI HAYASHI, BARITONE



川島幸子  
ソプラノ

東京音楽大学ピアノ科卒業、ワイマール音楽大学大学院声楽科修了。愛知県立芸術大学准教授。横浜市在住。



三輪陽子  
アルト

愛知県立芸術大学卒業、同大学院修了。二期会会員、愛知県立芸術大学、金城学院大学などの非常勤講師。愛西市在住。



北村敏則  
テノール

京都市立芸術大学音楽学部卒業、同大学院修了。堺市新人演奏会、東京国際声楽コンクール審査員。京都市在住。



林 剛一  
バリトン

東京芸術大学卒業、同大学院修了。愛知教育大学教授。名古屋市在住。



植松 峻  
指揮

東京学芸大学、東京芸術大学卒業。ウィーン国立音楽大学留学。1976年に岐阜バッハ合唱団を設立。名古屋芸術大学助教授、岐阜大学教授、椋山女学園大学教授を歴任。現在、岐阜大学名誉教授。岐阜市在住。

### バッハの「ミサ曲口短調」



ユネスコの世界記憶遺産に登録された  
バッハの自筆による「ミサ曲口短調」の楽譜

「ミサ曲口短調」は、バッハの作品の中でも、「マタイ受難曲」「ヨハネ受難曲」と並んで、最高峰に位置します。完成は、バッハの亡くなる前年、最晩年の作品です。しかし、この作品は、最晩年に一気に作曲されたものではありません。最も古い「サンクトゥス」は1724年、「キリエ」「グローリア」は1733年の作曲であり、最終的に完成されたのが1749年といわれています。演奏だけで2時間を超えるこの作品は、実際の教会でのミサで用いることを考えていたとは思えない長大さです。バッハは、実用的な「ミサ曲」というより、自身の声楽曲の作曲技法の集大成として、完全な形のミサ曲を完成させようとしたと考えられています。「ミサ曲口短調」は、独唱、重唱、合唱という声楽曲としての多様な構成だけでなく、対位法、協奏曲的な手法、グレゴリオ聖歌を引用したモテット風の様式、イタリア・オペラのレチタティーヴォとアリアの手法など、様々な表現様式をもつ作品となっています。バロック音楽の統括ともいえる作品です。

2015年10月、バッハの自筆による「ミサ曲口短調」の楽譜、99ページの手稿の個人記録がユネスコの世界記憶遺産に登録されました（日本では翌16年から名称を「世界の記憶」に変更）。楽譜が登録されたのはベートーヴェンの「交響曲第9番」（01年）に次いで2件目です。

### 岐阜バッハ合唱団と名古屋バッハ合奏団

東京芸術大学の「バッハカンタータクラブ」を創設し、その学生指揮者として活動した植松峻が、ウィーン留学後の1976年に岐阜の地に「岐阜バッハ合唱団」を15人のメンバーで設立しました。「カンタータ4番」と「カンタータ12番」で第1回の演奏会活動を開始、以後、「ヨハネ受難曲」、「ミサ曲口短調」、「マタイ受難曲」と次々に大曲を取り上げ、名古屋バッハ合奏団による魅力あるオーケストラ付きの合唱曲を味わっていただいています。

今回は、合唱団として11回目となる「ミサ曲口短調」を演奏します。



2022年11月にはバッハの「ヨハネ受難曲」を演奏

2023.11/17 [金] 18:30 開演 サラマンカホール 入場料=3,500円（当日共・全自由席）